

高きゴールを目指す パース・ウィルキャッツ 走り続けるアスリートたち

ウィルキャッツになくはない存在

～外国人枠で活躍する日本人プレーヤー～

チームメートと同じように練習ができるようになるまで5年掛かった。しかし、26歳の時に全日本候補選手、そして日本代表選手として1992年、1996年、2000年のパラリンピックに3大会連続で出場した。現役にこだわりながら今もなお、次へのステップのため前進し続ける、今年43歳の岩野博選手に話を伺った。



車椅子バスケットボールとの出会い

Q：車椅子バスケットボールとの出会いについて聞かせて下さい。

A：高校3年生の18歳の時に事故に会い、20歳ぐらいから本格的に車椅子バスケットボールを始めました。入院中に車椅子バスケットボールチームの「千葉ホークス」の先輩達がチームの勧誘に来てくれ、その後、先輩達のプレーを観に行ったらとにかく「すごい」と感じました。衝撃的だった。ならば「自分もやってみよう」という気持ちから始めました。当然、最初は思う通りにプレーができず、車椅子を押す手の皮も、剥けている上からまた剥けたりしていました。

Q：うまくいかず、辞めようと思ったことはなかったですか？ 辞めなかった理由は？

A：なんで辞めなかったんだろうか…。面白かったんでしょうね。チームスポーツは、もともと好きでしたから。怪我をするまでは、ずっとバレーボールをやっていたので。まあ、決まり文句ですけど、先輩が「女にモテるぞ」とか言っていたのもあったのかも(笑)。モテた試しはないですけどね。

Q：しかし、その当時「自分がその後、日本の代表選手になる」と思っていましたか？ どの辺から日本代表を意識し始めたのですか？

A：所属していた「千葉ホークス」には、日本代表選手が多く在籍していました。だから「お前もなれるよ」と感じさせてもらいながらプレーしていました。それだけ素晴らしい先輩に教えてもらってたんで、他の選手からしたら、自分の環境はよかったですね。

3回のパラリンピック

Q：バルセロナパラリンピックに出場したのは、何歳の時に、そしてその時の感想は？

A：28歳の時でした。その時はもう何がなんだか分からなかったですよ。自分でどんな試合に出たかもあまり覚えてないですからね。会場の大きさだとかも…。あの大会では、日本と開催国スペインの試合があったんです。その当時、日本とスペインは同じくらいのレベルだったのですが、スペインは唯一、日本には勝てるだろうって思っていたようです。実際、日本は見事に負けましたが…。それにしても、会場が満席で、異様な雰囲気でしたね。あんなに満タンになるんだって思いましたよ。3万人とか入っていましたからね。立ち見でした。

Q：アトランタ大会の後、アメリカのチームからのオファーを断った時は、どういう心境だったのですか？ ご自身の中でどちらかという受身の方が強かったのですか、それともまだ「俺が」と思っていたのですか？

A：どうでしょうね…。その時は行きたかったんでしょうけども、「今の生活をやめてまで行けるか？」と多分悩んだんですよ。だから、断ったのでしょうか。断った後はもう他からのオファーはないと思っていました。

Q：でも、続けてシドニー大会の後に。

A：そうですね、シドニーのチームから声が掛かった時は、それはありがたかったですね。

Q：そして、2002年にパースのチームからオファーを受けることに。きっかけは？

A：6年前にたまたま北九州で世界選手権があり、前の年(2001年)に予選があったんです。その時に今のチームメートのブラッド・ネスとかジャスティン・イヴサンが豪州代表として来ていて、彼らと話す機会がありました。「障害の軽い選手はたくさんいるけど、重い選手がパースにはいないから、どうか？」と誘われて…。普通はどのチームも、ポイントゲッターが欲しいわけですよ。だから障害の軽い選手で、持ち点が4点とか4.5点とかの高い選手が欲しいんです。だけど、パースにはたまたま障害の軽く、若くて上手な選手がたくさんいるから、障害の重い選手が必要だったようです。そこで、自分には経験があるし、持ち点が低いので彼らの望みとマッチしたんでしょうね。でも、その時は話だけ。その後、結局、誘ったブラッド自身も話した記憶すらなくなって(笑)。まあ、相手となる自分はジャパニーズですから。要は、レベルが低いわけだから、記憶に残っていませんでした。でも、実際パースに行ってみるかという話になったんですけど、チームとの条件面が折り合えず、ならばうちの嫁と1回新婚旅行がてらパースに行こうということにして、バスケットボールの車椅子を持って来たんです。そして1週間、練習に参加して、僕のプレーを見せたんです。そうしたら、チーム側の条件が変わった。

Q：思い切られましたよね、奥様の後押しもあって。

A：いまだに言われますよ、あれは新婚旅行じゃないって。バスケットばかりやっている新婚旅行なんかあるわけじゃないですよ(笑)。

Q：所属しているチームの監督は、来年の北京パラリンピックの車椅子バスケットボールの豪州代表監督ですが、日豪対決でお会いすることになるかもしれませんね？

A：いや、ないでしょう。僕は日本の代表には入らないと思うんで…。

Q：しかし、目指してはいらっしゃいますよね？

A：まあ、呼ばればやぶさかじゃないですけど。本当は、オーストラリア代表で行きたいですね(笑)。



広い視野でチャンスを量産するゲームメーカー

岩野 博 選手

Logo Courtesy of The Perth Wheelcats

Q：パラリンピックには2回目の出場となったアトランタ大会の時は？

A：アトランタの時は前回のバルセロナよりも経験があったので、もっと動けたと思います。

Q：そして、3回目のシドニー大会。

A：はっきり言って、シドニーの時はどっちかという、ちょっと落ちていたかもしれないですね。その当時はもう、教える方が多かったの。でもその割には代表に呼ばれたんで、「じゃあ、まだいけるかな」というのはありました。

Q：2004年のアテネ大会の時、日本代表の選考から漏れ、悔しい思いをされたのでは？

A：いや、別に悔しくはなかったです。必要とされるところでやるというのが信念なので。呼ばれば行くし、呼ばれなければ別にできないだけで。僕が選ぶことではないので。

Q：では、来年の北京大会もそこまでしがみつくと必要はないとお考えですか？

A：はい、別にしがみつくといいか、必要とされればやるし、されなければやらないし…。

Q：その点がご自身のポリシーですか？

A：そうですね。「岩野が来てくれて、試合ができるから楽しいんだよ」と言ってくれるところでやりたいと思っています。必要とされれば行く。必要とされれば楽しい。今のパースのチームも、必要としてくれるから楽しいんです。意味もあるし、意義もある。他の選手もリスペクトしてくれるから、教え甲斐もある。自分も一緒になって成長できる。成長できるっていう実感があるということ、それが一番大切だと思っています。

Q：今のご自身の地位は、20年以上の経験からのものもあると思いますが、28歳のバルセロナ大会や32歳のアトランタ大会の時は、もっと能動的な部分もあったのでは？

A：もちろん、その頃は考え方も若かったですから。「俺が、俺が」とは思っていましたよね。

プロのアスリートとして

Q：パースに来るため、36歳でお仕事は辞められたと伺っています。

A：はい。県庁を辞めて、パースでの1年目のシーズンは37歳の時でした。

Q：お仕事とプロのアスリートのどちらかを取るという時に、プロのアスリートを取った理由は？

A：1回は海外でプレーしたいというのは昔からの願望でした。アトランタ大会の後のオファーを断った時はとても後悔したので、後悔する前にやってみよう、と思い決断しました。

Q：決断するにあたり、奥様の一言もあったみたいですが。

A：そうですね、うちの「まだあんたは伸びるんだから行ってこい!」と。

Q：まだこの先チャレンジがある、ということですよね？

A：そうですね。要は日本でプレーしていたら、とりあえずはトッププレーヤーとしていられるとは思ったんです。でも、それだとはやはり将来、自分が後輩に教えるばかりで、日本の中では自分がさらに上を目指すということではなくなってきてしまう。だから、更なる自分を育てるためにチャレンジした方がいいかな、というのがありました。

(次頁に続く)



(右写真) 岩野選手「シュートを入れるためにプレーする。シュートを打とうとした時、相手ディフェンスが寄って来て、コースがなくなるからパスを出す。シュートが打てなければ相手にとって怖い選手ではない。最終的にはシュートにこだわりますね。」